

5月の発生予報および防除上の注意事項

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は次のように予想されます。

沖縄群島

1 さとうきび

春植えにおけるメイチュウ類の防除対策

- 4月下旬の調査の結果、新植圃場の芯枯茎率は0.6%（前年0.7%、平年1.0%）と平年よりやや低かった。
- ふ化した幼虫は、春植えされた苗の葉裏および葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせる。
- 有効分けつ期の芯枯れ防止をねらい、食入初期の幼虫を対象にした薬剤防除を行う。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤（粒剤）を選択し施用する。

2 マンゴー

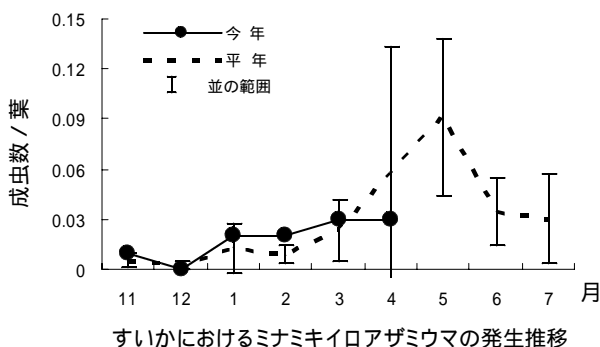
生理落果～果実肥大期の病害虫防除対策

- 4月下旬の調査の結果、炭疽病、チャノキイロアザミウマの発生が認められた。
- 病害対策として、施設内の通気をよくするとともに、薬剤による予防に努める。また罹病した葉・花序等は除去し、施設外へ持ち出し処分する。
- チャノキイロアザミウマの発生源となる不必要な新葉を除去し、ビニール袋に密閉して持ち出し処分する。
- チャノキイロアザミウマは水に弱いので、晴れた日に灌水を兼ねて動噴で洗い流すことも密度を下げるのに有効である。
- チャノキイロアザミウマは薬剤抵抗性を発達しやすいことから、同系統薬剤の連用を避ける。

3 すいか

(1) ミナミキイロアザミウマ
発生程度：並
予報の根拠

4月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.03頭（前年0.06頭、平年0.06頭）と平年並であった。



防除上注意すべき事項

- 本種は、灰白色斑紋病を媒介する。
- 施設外に蔓や葉を露出させないように、すそのビニールは土に埋め、側窓の防虫ネットは固定する。
- 青色粘着テープ等により早期発見し、早期防除に努める。
- 残渣は本種の発生源になるので、ビニール袋に入れるなどして施設外へ持ち出し処分する。
- 収穫後は施設内に残る本種を死滅させるため、株を抜き取り施設内を密閉する蒸込みを10日以上行う。
- 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

4 にながり

実腐病の防除対策

- a 本病は、5月頃から梅雨期にかけて多く発生する。
- b 多湿条件下で発生しやすいので、過繁茂を避け風通しをよくする。
- c 枯葉は本病の発生源となるので除去し、圃場外へ持ち出し処分する。
- d うどんこ病など葉の病害が本病の発生を助長するおそれがあるので、同病の防除に努める。
- e 収穫は晴天時に行い、果実が濡れている場合は乾かしてから出荷する。
- f 平成20年度技術情報第1号(平成20年5月1日付け)参照。

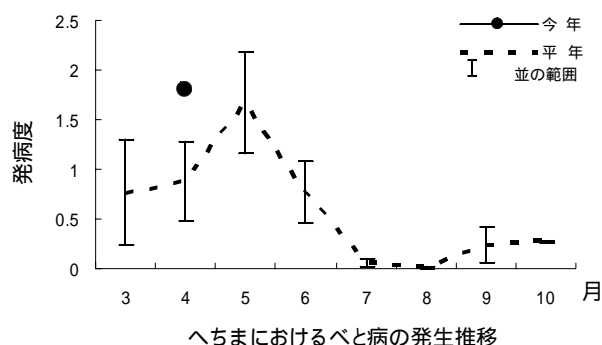
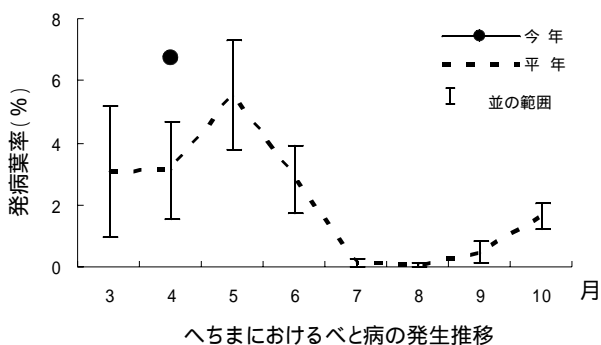
5 へちま

(1) べと病

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 4月下旬の調査の結果、発病葉率は6.7%(前年1.6%、平年3.1%)と平年よりやや高く、発病度も1.8(前年0.4、平年0.9)と平年よりやや高かった。
- b 本病は多湿条件下で発生しやすい。気象予報によると向こう1か月の降水量は並の確率が40%と予想されており、発生はやや高いまま推移すると考えられる。



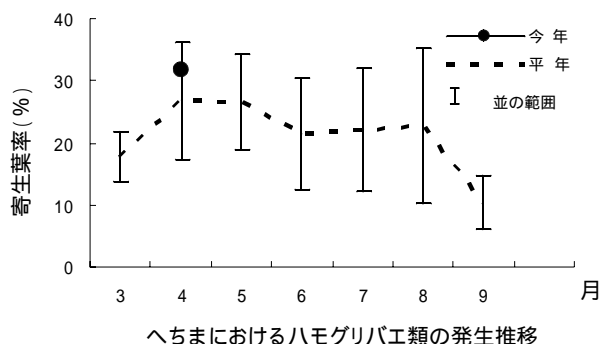
防除上注意すべき事項

- a 雨滴等による病原菌の跳ね上りを防止するため敷草かビニールマルチを行う。
- b 排水、通風をよくする。
- c ハモグリバエ類幼虫の食害痕等から病原菌が侵入しやすいので同虫の防除を行う。

(2)ハモグリバエ類

発生程度：並
予報の根拠

4月下旬の調査の結果、寄生葉率は31.7%（前年15.2%、平年26.7%）と平年並であった。



防除上注意すべき事項

- ハモグリバエ類は初期防除が重要である。多発してからは防除が困難になるため、早期発見に留意する。
- 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。

ミナミキイロアザミウマの防除対策

- 4月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は1.2頭（前年0.3頭、平年0.5頭）と平年より多かった。
- 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- 圃場内外の雑草は発生源となるので除草を行う。
- 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

6 トマト

トマト黄化葉巻病(TYLCV)の防除対策

- 4月下旬の調査の結果、一部施設で本病の多発生が見られた。
- 媒介虫のタバコナジラミの防除を徹底する。
- 栽培終了後はタバコナジラミを薬剤防除したうえでトマトを抜き取り、施設を1～2週間密閉して蒸し込み処理を行う。
- 本号8頁参照。

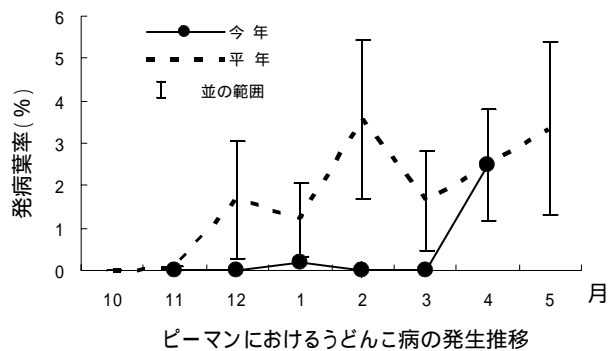
7 ピーマン

(1)うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

4月下旬の調査の結果、発病葉率は2.5% (前年1.8%、平年3.2%)と平年並であった。



防除上注意すべき事項

- 摘葉残渣や老葉は本病の発生源となるため、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、葉の表裏をよく観察し、早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。